ジュネーヴ州の音楽教育に関する一考察

－公立幼稚園および公立小学校における「リトミック」授業－

鹿児島大学　今　　由佳里

A Study of Music Education in Canton of Geneva

－ The classes of the "Rythmique" in the public elementary school and kindergarten－

Yukari KON

１．はじめに

音楽を聴き，感じたままに身体で表現するリトミック（Rythmique）は，全身でリズムや音の高さなどを感じるとる活動を通して，創造力や表現力，思考力などがバランスよく身につけられることから，日本の幼児教育でも盛んに取り入れられている。リトミック教育の創始者エミール＝ジャック・ダルクローズ（Émile Jaques-Dalcroze, 1865－ 1950）は，スイスのジュネーヴでこのメソッドを考案した。そのため，現在でもスイスの公教育の中には彼のリトミックの影響が色濃く残されている。それは，ジュネーヴ州内の公立学校において，「音楽」とともに「リトミック」が教科として並存していることからも容易に推察されるであろう。なおスイスでは，就学前教育にあたる幼稚園も義務教育に該当し，公立小学校内で幼児教育が併せて行われている。ジュネーヴでは，小学校の中に教室が割りあてられ，幼児部（４歳・５歳児）と小学校（６歳～12 歳児）が一体となって教育がなされている。カリキュラムに関しても同様で，幼稚園から小学校卒業まで教育内容は連続して計画・構成されており，幼稚園は小学校教育の一環としてみなされている。

スイスの公立学校における音楽教育に関する先行研究は，日本では少ない。筆者はこれまでジュネーヴにおける複数の公立小学校（幼稚園併設）において 100 時間を超えるリトミック授業を視察してきた。そこでは，リトミックを中心に据えた種々のアプローチの中で，子ども達が身体全体で音楽表現を楽しみ，意欲的に授業に臨んでいる姿が見受けられた。そこで本稿では，これまで日本では紹介される機会のなかった公立幼稚園および公立小学校における教科「リトミック」について，ジュネーヴ州の Ecole du Mail におけるリトミック授業の分析，リトミック専科教員ヴィヴィアン・グランジョワン氏へのインタビューから，そのあり方と期待される効果について明らかにしていきたい。

２．ジュネーヴ州の学校音楽教育の現状

スイスの教育制度において，連邦レベルで統一されているのは義務教育年数と就学開始年齢，学年の修業時期と期間のみであり，教育制度の多くは各州が自治権を有している。そのため，各州は教育システムやカリキュラム，学校の休業日に関しても独自の教育方針を立てている。州の自治権とともに，学校長による権限も大きい。ジュネーヴでは，校長の采配によって芸術教科授業の有無や時間数について流動的に決められている。一般的にジュネーヴの小学校では，４Ｐ（７～８歳）[1]の学年まではリトミック，５Ｐ（８～９歳）[2]からは音楽の授業が設定されている傾向にある。しかし，これら以外にも１Ｐ（４～５歳）[3]と２Ｐ（５～６歳）[4]合同の合唱授業が毎週設けられているジュネーヴ市内の小学校の授業を観察したことがある。この時間割は，クラス担当教員から校長へ要望し，実現された時間割であった。このことからも，各学校によって，弾力的に時間割が設定されている現実が理解できる。

（1）音楽とリトミック

ジュネーヴの小学校において授業を観察していると，低学年においては理論や技術的なことを教えることがないことに気づかされる。子どもたちが楽譜を手にして学習する場面も同様にみられない。これはジュネーヴでは，最初に五感をはたらかせて音楽を感じ取り，想像力や創造性を伸ばすことを教育の中心に据えているからである。そして，この方針に沿った理想的なメソッドがリトミックと多くの人に捉えられている。

さて，各州が教育の自治権を有し，各学校にも大きな裁量権が有されていることについては既に述べているところである。ジュネーヴ州の多くの小学校では，４Ｐまではリトミック，5Pからは音楽という傾向が強いということについても同様である[5]。州内いずれの小学校においても，低学年では身体の動きを取り入れた音楽教育を積極的に実践している[6]。授業時間に関しては一時間が 45 分で設定されているが，各授業の間に日本のような休み時間は設定されておらず，連続で授業時間が組まれているため，時間通りには始められないという特徴がある。音楽やリトミックなど教室を移動する授業では，子どもたちが教室移動やリトミック用のシューズに履きかえる時間も必要となるため，必然的に授業時間は短縮されている。

（2）授業における専科教員とクラス担当教員の役割

小学校では担任の教員にかわり，リトミックや音楽の専科教員が授業を担当している

[7]。彼らは巡回教員であり，曜日によって担当する小学校が変わったり，あるいは午前と午後では異なる小学校で教えるなどいくつかの小学校を掛け持ちしている場合が多い。

クラス担当教員と専科教員の授業における役割は，日本とは全く異なっている。リトミック専科教員は，授業を担当すること，そしてクラス担当教員はリトミック室に子どもたちを引導した後もその場に残り，授業中おしゃべりをしていたり，よそ見をしている児童を注意する役目を担っている。それは，専科教員が話しをしている最中にも行われ，場合によっては専科教員の授業の声を掻き消すほどの大きな声で注意を発している。何度も注意を受ける子どもは，罰としてクラス担当教員の隣の長椅子に座らせられ，活動に参加できない場面も見られた。しかし，クラス担当教員は専科教員が行っている授業の内容に関与することはなく，授業環境を整えることに終始している。

（3）教室と教具，教材

ジュネーヴ州公立小学校には，音楽室とは別にリトミック教室が設置されている。筆者がこれまで授業観察にうかがった小学校のリトミック室は，窓が大きくとられた床張りの開放的な広い空間にアップライト・ピアノが一台置かれ，壁際には子ども用の丈の低い長椅子，オーディオセット，小さな黒板があるだけのシンプルなつくりのものが多かった。

写真１：小学校のリトミック教室

リトミック教室の楽器庫には，リトミックの授業で用いられる多くの教具が収納されている。例えばボールやロープ，布，バトン，カラーボール，サッシェ等はメソッドの典型的な道具と理解されるが，この他にリボンやクッションなど楽器に限らない多様な道具が授業に取り入れられている[8]。

写真２：リトミック教室の楽器庫

スイスでは，日本のように子どもたち一人ひとりが所有するような教科書はなく，担当教員が子どもたちの実状に応じて教材を選択している。”Le jardin des chansons”や”La fête aux chansons”という教本は，ジュネーヴの音楽・リトミック専科教員に一部ずつ支給

されているため，この中の楽曲は多くの学校で利用されている。授業で用いられている楽譜は，フランス語圏のジュネーヴではフランス語の歌詞のものが多いが，4 か国語を公用語とする背景も影響し，ドイツ語や英語の楽曲も多く取り入れられている。

３．ジュネーヴ州公立小学校におけるリトミック授業事例の分析・考察

本項ではジュネーヴ州の公立学校 Ecole du Mail（以後，マイユ小学校）における２Ｐ（５～６歳），３Ｐ（６～７歳）の授業から，リトミック授業の概要と特徴，効果について，授業の分析と考察を通して明らかにしていきたい。

（1）マイユ小学校における実践

マイユ小学校は，旧市街に近いジュネーヴ市の中心部に位置する公立小学校で，ジュネーヴ市内の中でも歴史が古い学校のひとつである。

①　２Ｐ（５～６歳児対象）の授業

観察日時：2012 年 11 月 19 日（月）４時間目

指導者　：ヴィヴィアン・グランジョワン

クラス　：２Ｐ（５～６歳児）

児童数　：14 人

教室　　：RYTHMIQUE

季節に因み，冷たい手を温める方法を考えることから授業が始まる。子どもたちは，手を擦ったり，息を吹きかけたり，ポケットに手を入れる仕草など，いくつかのジェスチャーを音楽に合わせて即時反応している。ハリネズミの歌では，拍にあわせて針を刺す身体の動きが取り入れられている。以下表１は，授業の詳細である。

表１：２Ｐ（５～６歳児）の授業内容

順番	授業の流れと活動内容
1	出席確認。教員は，子どもたちへ手を繋いで円になるように指示している。次に両手を伸ばして大きい円になる。ポケットにお人形を入れていた女の子は，先生から指摘され，長椅子の方へ置きに行く。
2	教員が「冷蔵庫に入っているみたいに今日は寒いね」と言って，手を擦り合わせたり，手を貝のようにあわせて，手の平へ息を吹きかけると，子どもたちも同じ動作を行う。

3	「冷たい手を温かくする方法はどんなのがあるかな」と教員が問いかけると，手を擦ったり，腕組して手を自分の脇の下のところに隠したり，手に息を吹きかけたりする動きを見せている。中には，両手をズボンやスカートのポケットへ入れたり，片方の自分の上着袖口にもう一方の手を隠す仕草を見せる子どももいる。
4	教員のピアノにあわせて，子どもたちは教室の中を歩き回る。教員がピアノを弾きながら「ポケット」や「腕組み」などの指示を出すと，子どもたちは先ほど自分たちが寒い時に手を温める方法として発表した動きを瞬時に行い，その仕草をしながら歩みを続ける。
5	教員が，ハリネズミのぬいぐるみを見せ，動物の名前を子どもたちに質問すると，子どもたちは「はりねずみ」と答えを返している。次に教員がハリネズミになってみようと指示すると，子どもたちは正座して顔を隠すように床にうつぶして，ハリネズミの真似をする。音の上がり下がりに応じて，上体を起していったり頭を隠すように下行したりする。教員のピアノのスピードは時に素早く，子どもたちは瞬時に反応をしている。先生のピアノが H-B-A-As と下行型の音を鳴らすと，ハリネズミが土の中に潜り込むように顔を隠した姿勢をする。
6	ハリネズミの歌を歌いながら手遊びを行っている。左の手の平に右手の人差指で針を刺すような仕草を，拍にあわせて行っている。
7	一人の女の子がバイクに乗っているような手の仕草で教室を一周して走り回る。次に先生を中心にして，先生の周りを女の子が走り回る。男の子は先生の傍らで座ってその様子を見ている。今度は逆に男の子がバイクになって走り回る。ストップと先生が合図をしたら，直ぐにその場に止まる。次に歩みを変えて，教室内を全員がギャロップで一周する。
8	先生がピアノの椅子に座って，紙袋から毛糸でできた玉房状の毛玉を子どもたちの前に出して見せると，子どもは笑顔でとても嬉しそうな表情をしている。子ども一人ひとりに毛玉をキャッチボールのように投げて受け取らせる。毛玉を全員が受け取ると，子どもたちは天上へ投げ上げたりしている。中には，天井にぶつけるほど力強く投げられる子どももいる。
9	先生のピアノにあわせて，毛玉を右手から左手に置き換えたり，左右に何度も転がしたりして，音価と玉を転がすスピードをコントロールしている。頭の上に毛玉を置き，先生が１，２，３と合図を送ったら勢いよく床に落とすという活動も行っている。
10	それぞれの児童が毛玉を床に置き，それをよけるようにフロアーを歩き回る。毛玉をまたいだり，足を触れないように注意しながら集中して歩いている。教員が，ピアノを止めて，「自分の毛玉を指差して」と指示すると，子どもたちは今いる場所から一斉に自分の毛玉を指さしている。
11	毛玉を教員に返し，静かに教室を退出する。

授業を観察していて気づくことは，音高や速度，転調の変化を子どもたちは瞬時に聴き分け，身体の動きで的確に反応しているという点である。それは，集中力と瞬発力，記憶力をも養う活動が低学年から行われているということである。また，授業では常時季節感が感じられるアプローチがなされている。冷たい手を温めるために手を擦り合わせたり，息を吹きかける仕草，ポケットに手を入れて歩き回るなど，授業の導入時から音楽の変化に自身を即時反応させるような身体の動きを取り入れている。また，授業中盤に行われているハリネズミの動きを自らの身体を用いて表現する場面では，音の動きにあわせて上体を起き上がらせたり，指で針を突く仕草を取り入れるなど，音楽の要素を聴き分けて反応している。

ここで特筆すべきことは，音・音楽の使い方が工夫されているという点である。教員は常

に，子どもたちに音楽を与えているわけではなく，音を用いないで子どもたちに心の中で音楽を感じ取らせる時間も意図的に設定している点である。

② ３P（６～７歳児）の授業

観察日時：2012 年 11 月 19 日（月）３時間目

指導者　：ヴィヴィアン・グランジョワン

クラス　：３P（６～７歳児）

児童数　：15 人

教室　　：RYTHMIQUE

この授業では「粘土のピエロがチューインガムになっている」という教員の問いかけから始まる。子どもたちは一様に不思議な様子を見せるが，身体で表現を考えていくうちに，次第に自分なりの理解に到達している。以下表２は，授業の詳細である。

表２：３P（６～７歳児）の授業内容

順番	授業の流れと活動内容
1	隣の人と間隔を保たせるために，手を繋いで円になって広がる。手や足をぶらぶらとしてウォーミングアップを行う。
2	教員は「粘土のピエロがチューインガムになっている。この意味がわかる人いる？」と子どもたちに問いかける。児童はきょとんとした不思議そうな顔をしている。そこで，教員は別の表現の文章を提示し，言葉の表現方法一つで理解が変わることを提示する。さらに，「粘土」「ピエロ」「チューインガム」といった単語でなら意味がわかることを確認したうえで，そこから考えを発展させていく。「粘土のように」「ピエロのような動きで」「チューインガム」のように自分で動いてみることで「最初は意味が分からなかったけど，自分で動いてみたら，自分で空間をつくってみたら，少しずつわかってくるよね」と話しかけている。また「文章を自分のわかる方法に置き換えて理解していく」ことの大切さを語っている。最後に自分の周りの空いている空間の認識について「部屋の中で暴れたらテレビや机とか壊れちゃうよね。それはあいている空間じゃないからだよね。身体で動きをつくる場合は，自分の周りの空間について把握しておくことも大事だね」と話している。
3	先生が見本を見せ真似するように子どもたちに指示すると，先生の動きを覚えている一人の子どもが同じ動きをする。教員が「次は自分で考えてみて」というと，子どもたちは手をクロスにして膝をたたいたり，様々な動きを考えだしている。他にどんな動きがあるか，ピアノにあわせて自分の考え出した手拍子を打ってみる。先生は，ピアノを意図的に乱雑に弾いて，子どもの多様な動きを促している。
4	教員は子どもたちへ「音楽に合わせてやったのを覚えている？」と確認する。音楽にあわせてどのような動きをしたかを思い出し，分析する活動を行う。分析するということは，その動きをしっかりと記憶していないとできない。どちらの足から動かしたか，どの位置で手を打ったかなど，細かく質問し，逆に曖昧な記憶を明確化している。さらに音楽を聴かせて，どのメロディーの時にどの動きをしたか，実践してみる。上手にできた児童に注目し，そこで，「記憶する」とはどういうことかを順を追って体験していく。「思い出す，分析する，再確認する」という一連の段階をひとつずつ提示し，これが「記憶する（Memorisez）」活動と教えている。

5	秋の歌を歌いながら，先生の真似をして身体動作を付け加える。音楽の雰囲気が変わるところで，身体動作も変える。ジャンプしたり，手を落ち葉が舞い落ちるようにひらひらさせたり，子どもたちは音楽に反応して楽しそうに活動している。
6	教員が「音楽に合わせて動けた人」「動きを覚えた人」と 2 つの質問を投げかける。何人か挙手をしている児童を指名して再表現させる。
7	「最初に何をしたか」と問いかける。児童は，教員の問いに手を振って見せて応えている。何人かが，音楽に合わせて動きを見せている。教員が「音楽の大きなフレーズをきいて，動きを変えよう」というと，それぞれが身体をつかって理解したことを表現している。「試して，動きを覚えて，音楽にふさわしいかどうかを確認してみよう」と教員が指示すると，子どもたちはその場で足踏みなど始める。
8	教員は子どもたちに，T の字を身体で形作るよう指示する。子どもたちは，男女二人組になって，両手を肩の所で床と平行になるよう真っ直ぐに伸ばし，両足も揃えて立つ。2 人が前後に重なるように立って。先生の指示で手を垂直にのばしたり，斜め上に挙げたりして 2 人組でポーズを作る。先生の合図でポーズを瞬時に変える。
9	「静かに教室へ帰って」という先生の指示のもと，子どもたちは一言も話さず 2 列で教室を退出する。

授業は教員による「粘土のピエロがチューインガムになっている」という問いかけから始まった。子どもたちは最初どうしたらよいか戸惑っている様子であったが，教員が「粘土のように，形をつくり」「ピエロのように，自由で滑稽な動き」「チューインガムのように，伸びがあり柔らかい」と一語一語その意味するところを子どもたちと考えていくと，子どもたちは自身の身体を用いて動きを摸索する活動に自然に移行した。この活動は６～７歳児には，難しすぎる課題ではないかと筆者は当初感じていたが，子どもたちは最初すら戸惑ってはいたものの，次第に活動にのめりこみ独創的な身体の動きをつくりだしていた。またこの授業では音楽と身体の動きを記憶するということに教員はこだわりを持っている。授業では，子どもたちが音楽にあわせて身体で表現したことを「思い出す，分析する，再表現する」活動を行っている。指導者グランジョワンは，詳細に自分の身体で表現したことを思い出し，「再表現」することができることが「自分のものになる」という意味をなすと授業後，筆者に語ってくれた。

４．リトミック授業の音楽的効果と教育的効果

ジュネーヴ州では，低学年時にはリトミックの時間を特に重視している。授業観察にうかがったマイユ小学校の教員控室[9]において，リトミック専科教員以外のクラス担当教員と話をしていた際，リトミックの時間は子どもの心を解き放つために必要な時間であり，この時間があることで教室での他の授業も集中して臨めるようになるということを，多くの教員が語ってくれた。子どもたちにとってリトミックは，自分自身を表現できる楽しい時間であり，この時間があることで学校生活全体に良い影響をもたらしており，欠くことのできない

時間と認識しているのである。

授業の内容は，歌唱・器楽・鑑賞という領域を分化して教育するのではなく，リトミックの中でそれぞれの学習が複合して行われている。歌を歌いながら身体を動かす，歩きながらタンバリンを鳴らす，鑑賞した音楽にコレグラフィーするなどの活動が授業中頻繁に行われており，子どもたちは表現力を鍛え，創造的な学習へと繋げている。また，リトミックの典型的な活動のひとつであるが，教員の鳴らす太鼓のニュアンスにあわせて歩みのバリエーションを変えながらリズムを感じる，などの活動も授業の中で頻繁に見られる光景である。

ジュネーヴではリトミックを学校教育へ導入する目的のひとつとして，コミュニケーション能力の伸長も期待している。授業を観察していると，クラスメイトとの関わりが多い活動に気づかされるが，友達の真似をして身体を動かしたり，協力してリズムを考える，あるいは，ブドウの房を表現するという課題では，一人ひとりが体を丸めて葡萄の粒になり何人かで協力して葡萄の房を形づくる様子も自然に見られた。リトミックを通して，他者と円滑にコミュニケーションをとっている姿が認められるのである。また教員は，授業中頻繁に子どもたち一人ひとりの名前を呼んでコミュニケーションをとっており，教員と子ども，子ども同士のコミュニケーションが円滑に行われていた。

さて，リトミックを取り入れた音楽学習は，子どもたちにとってどのような効果が期待されるのであろうか。筆者のインタビューに対して，指導者グランジョアンは，授業に対する自身の考えを以下のように答えてくれた。

> リトミックを取り入れることは，音楽に関して子どもたち自身の可能性をひらくことに繋がる。また，音楽を自分の身体をつかって掴み取ることができるのである。身体の動きを取り入れることによって，子どもたちの音楽的感覚は効果的に発達させることができる。また同時に，動きの具体的な作用を知ることもできる。音楽を聴いて自分に起こったことを，身体の動きを通して再認識することもできる。それを創造して，表現して，自分が考えたことを外に出していく。理解して自身に取り入れたことを外に出す（表現する）こと，再表現することが重要なのである。
>
> ヴィヴィアン・グランジョアン

音楽は目に見えない抽象的なものである。したがって，時に音楽以外の媒体を通して聴きとったことを再表現する機会を持つことは，子どもたちの音楽理解を推進することに繋が

るのではなかろうか。また，音楽の要素を自分の身体を用いて習得し，表現する活動は，感覚器官の未分化な低学年の子どもたちの成長発達に有効に作用するものと考えられる。さらに，このことは子どもたちの想像力を膨らませて創造性を養うことにも繋がっていくのである。

ジュネーヴ州のリトミック授業を通した音楽学習は，聴覚にはたらきかけるだけではなく，子どもたちに集中力や反応力，記憶力にも大きな力を発揮していた。また，子どもたちの溢れるエネルギーを発散させて，コントロールする術もあわせて身につけられるものであった。

小学校におけるリトミックの学習効果は，①発見の力をつけること，②音楽と身体の動きの関係を知ること，③記憶力を伸ばすこと，④創造，即興の力をつけること，⑤社会性を養うこと，という 5 点に集約することができるのではなかろうか。リトミックは，音楽の可能性を拡げるだけではなく，身体や言語表現にも大きな影響を与えている。子ども達に秘められた可能性を多方面に拡げ，他者に示していくことは学校教育の中で重要な時間になるものと考えられる。

５．おわりに

ジュネーヴ州の小学校でリトミック授業を初めて観察した日，子どもたちが整然と２列に並び，リトミックシューズのみを手にして教室に向かって来る姿が，非常に印象的であった。本稿で対象としているジュネーヴは，前述しているとおりリトミック教育の創始者ダルクローズが教鞭をとった地である。そのため彼の音楽教育思想は，プライベートな音楽教育機関のみならずジュネーヴ州の学校音楽教育にも大きな影響を与えていた。音楽専科教員と同様にリトミック専科教員[10]が教鞭をとり，州の公教育課には「音楽・リトミック科」というセクションが置かれていることからも，ジュネーヴ州におけるリトミック教科の普遍性が理解できるであろう。

ジュネーヴ州の取り組みについて今回検討を行ったが，リトミックの授業は子どもの感性にはたらきかけると同時に心を開放し，「音楽好き」の子どもを自然に社会へ生みだしている教育ではなかろうかと推察できた。

付記：本研究は，平成 28～30 年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号 16K04775（研究代表：今由佳里）の助成を受けて行っている研究成果の一部である。

【参考文献】

Département de l'instruction publique, Direction générale de l'enseignement primaire, Ecole Primaire, 2007.

Département Formation et Jeunesse du Canton de Vaud, LA MUSIQUE A L' ECOLE: Guide méthodologique à l' usage des enseignants des classes enfantines et primaires, Loisirs et Pédagogie, 1987.

---

[1] ４Ｐは，７～８歳児の学年にあたる。ジュネーヴ州では 2010 年に，学年の名称が変更され，就学前教育からの連続した学びをおしだしている。

[2] ５Ｐは，８～9 歳時が主となる学年。ジュネーヴでは飛び級と留年制度をとっているため，年齢は一年で一学年進級した場合のものである。実際には，2 年飛び級した児童，3 年留年してしまった児童なども珍しくない。

[3] １Ｐは，４～５歳児の学年にあたる。

[4] ２Ｐは，５～６歳児の学年にあたる。

[5] 筆者が 2012 年 12 月，ジュネーヴ州の 12 の公立小学校に通う児童（３P/４P）にとった「リトミック・音楽科授業に関するアンケート」（110 名回収）では，全員が「音楽に合わせて身体を動かす・リトミック」が活動の中に「ある」と回答している。また，小学校の時間割に「リトミック」という文言が使われている場合もあるが，「音楽」の時間割の中でリトミックの内容を行っている学校も見られた。

[6] 本稿では対象としていないが，ジュネーヴ州にあるインターナショナル・スクールに通う児童からも「Grade4 までは，リトミックもしていた。名前は Music だが，音楽にあわせて身体を動かしていた」という声も見られ，公・私立を問わず，リトミックがジュネーヴの学校教育の中に浸透していることがわかる。

[7] 郊外の小学校では，クラス担任が 5 教科に加え芸術教科も担当している場合があるが，現在では非常に稀なケースになっている。

[8] 州内に複数ある教育センターには，打楽器やオルフ楽器等とともに，民族楽器も豊富に所蔵され，授業で使用したい州内の教員に貸出されている。なお，筆者が視察したことがある教育センターには，日本の「ささら」や「木魚」等も貸出楽器として２つずつ陳列されていた。

[9] 教員控室とは，日本の職員室にあたるものであるが，日本のような教員一人ひとりの机等は配備されていない。ミーティング用のラウンドテーブル１つとコピー機や教員各自のレターボックス，掲示板，ミニキッチンが配備されているだけのシンプルなものである。教員は，昼食時は自宅へ戻り，また授業後も直ぐ帰宅できる就業環境のため，この控室に滞在している時間は長くない。

[10] スイスでは，州の正式な教員の身分であるが，リトミック・音楽専科教員はいくつかの小学校を巡回する場合が多い。